現代俳句と古典

飯塚　ひろし

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺　　子規

子規は奈良に遊んだ折に、法隆寺の茶店で好物の柿を食べた。「柿くへば」条件反射的に「鐘が鳴るなり」とは、子規らしい把握で面白い。碧梧桐が「柿食うて居れば鐘鳴る法隆寺」とすべきと指摘すると、子規は「そうすると、稍々句法が弱くなる」と澄まして答えている。大いに笑える問答ではある。折から鳴りだした鐘の音に、打ち興じている子規の姿が巧く表出されていて、いかにも微笑ましい。子規の柿好きは、自他共に有名であった。

毎年よ彼岸の入りに寒いのは　　子規

これは俳句らしくない句である。子規の母堂が呟いた言葉がそのまま俳句になった。子規の茶目っ気と、したり顔が浮ぶようで愉快である。句会でこの句を披露して「してやつたり」と得意満面の子規が子供のようで大いに笑える。季節感を鋭敏に捉えたユニークな作品である。

雪ふるよ障子の穴を見てあれば　　子規

子規は結核から脊椎カリエスの病魔に侵され、臥せって身動きが出来ない。盛んに降る雪を障子の穴から眺めているが、積雪量が気になって仕方がない。障子に穴を空けたのは、子規自身で幼児の様な所作に微笑ましくも哀れを誘う。障子の穴から外界を覗く子規の姿はユーモラスで、しかもペーソスの極みである。笑いの裏に哀愁が漂うのがよい。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

あとがき

俳句と云う僅かな言語で高度の伝達が可能な表現形式は、膨大な情報を迅速、的確に処理する上で大いに役立っている。この短詩型の小宇宙には、神秘な力が隠されていて、俳句が人々を魅了して止まない要因かも知れない。俳句が今日の盛況をみるに至ったのは、子規以後の子規山脈を形成した人達に負うところ大である。戦後、特に俳句の大ブームを来たし、あまたの有力俳人を生んだのである。俳句について語るとき、子規以後に重点を置くべきであろう。

滑稽俳句は大笑いを狙うと、大方失敗する。滑稽な句は、真面目な句を多作していると自然発生する。ただ可笑しいだけでなく、裏にペーソスが滲む句がベストである。幸い「滑稽俳句協会」を八木会長が設立され、平成の世に面白くて、哀愁の漂う俳句の発表の場を設けられた。雑誌「俳壇」にても「微苦笑俳壇」で後進の指導に当っておられる。俳壇の選句をしていると真面目な俳句が大半である。いま少し滑稽な句があれば愉しいのだが。読んでいて愉しい俳句が世の中に蔓延することを願う次第である。

（　完　）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。